

2024 年度 FD 活動報告

フェリス女学院大学 FD 委員会

委員長（学長） 小檜山 ルイ

副委員長（教務部長） 古内 洋平

FD 活動の主な目的は「教員が授業内容・方法を改善し向上させること」にあり、また現代は、その活動を学内外に公表することが義務づけられています。フェリス女学院大学は、これまでもさまざまな活動に取り組み、継続的に諸活動を推進してきました。

2024 年度の大学 FD 勉強会では「SA（スチューデント・アシスタント）の役割及び教育的効果について」と題し、SA を採用した複数の授業を展開している文学部コミュニケーション学科専任教員及び実際に SA を経験した学生からの具体的な事例を共有し、SA について認識を深めるとともに、SA の役割及び教育的な効果を検証し、今後の展望について考える機会をもちました。

加えて、2023 年度から導入したアセスメント・テスト「GPS-Academic」の分析報告会を開催し、分析結果を共有し、意見交換を行う場をもちました。

2024 年度も中期計画に沿って「各所管における FD 勉強会」を積極的に開催することとし、大学の FD 活動の活性化につなげることができました。

その他、例年どおり授業アンケートや学修行動調査、卒業生調査を実施し、学生の実態を把握するための情報収集に努めるとともに、大学院では博士後期課程の学生に対して、教育能力向上のために FD 活動への参加を課すなどの取り組みも継続しています。

内容

大学 FD 勉強会「SA の役割及び教育的効果について」	2,7
「2024 年度アセスメント・テスト分析報告会」	2,10
学修行動調査	3
授業アンケートと授業改善計画	4
卒業生調査	5
PBL 科目の推進	5
大学院の FD 活動	5
2024 年度活動内容	6

大学 FD 勉強会「SA の役割及び教育的効果について」

概要

日 時: 2024 年 12 月 4 日 (水) 18:20～19:20
会 場: オンライン (Zoom)
題 目: SA の役割及び教育的効果について

詳細は、p.7 を参照ください。

「2024 年度アセスメント・テスト分析報告会」

概要

日 時: 2024 年 7 月 24 日 (水) 10:40～12:10
会 場: 対面及びオンライン (Zoom)
題 目: アセスメント・テスト分析報告会

詳細は、p.10 を参照ください。

学修行動調査

学修状況（学修時間の実態や学修行動）や、学修成果の把握及び教育の内部質保証、本学学生の経年変化を把握するため、2024年度も FERRIS 学修行動調査、ベネッセ I-キャリアのアセスメント・テスト「GPS-ACADEMIC」を実施しました。特に「GPS-ACADEMIC」については、主観調査だけではなく客観調査に対応し、多面的な学修成果の可視化を狙いとしています。

【Ferris 学修行動調査】

目的	(1) 学生の学修状況 (学修時間の実態や学修行動) の把握 (2) 学修成果の把握及び教育の内部質保証
対象者	学部学生 2 年次生・4 年次生
実施方法	FerrisPassport のアンケート機能 (9 月卒対象者は、Google フォームを使用)
実施期間	4 年次: 2024 年 9 月 13 日 (金) ～9 月 30 日 (月) ※9 月卒対象者 2 年次: 2025 年 3 月 25 日 (火) ～4 月 9 日 (水) 4 年次: 2025 年 3 月 17 日 (月) ～31 日 (月)
回答率	第 12 回: 50.8% (2025 年 3 月 22 日付在籍者数: 1,036 名、回答者数: 526 名) ※2024 年度 9 月卒対象者含む (25 名) 参考: 49.0% (2024 年 3 月 22 日付在籍者数: 1,079 名、回答者数: 529 名) ※2023 年度 9 月卒対象者含む (25 名)
設問の概要	(1) 時間の使い方 (2) 授業での経験 (3) 学修への取り組み (4) 授業に対する意識 (5) 入学後から現在までの学修行動についての自己評価 (6) 本学の教育への満足度 (7) その他

【GPS-Academic】

目的	(1) 学生の学修状況 (学修時間の実態や学修行動) の把握 (2) 学修成果の把握及び教育の内部質保証
対象者	学部学生 1 年次生・3 年次生
実施方法	専用 Web サイト
実施期間	2024 年 4 月 8 日 (月) ～5 月 31 日 (金)
回答率	74.7% (2024 年 5 月 1 日付在籍者数: 827 名、回答者数: 618 名)
設問の概要	以下の項目を通して、問題解決能力を客観評価・主観評価する。 ・思考力 (批判的思考力、協働的思考力、創造的思考力) ・姿勢・態度 (レジリエンス、リーダーシップ、コラボレーション) ・経験 (自己管理、対人関係、計画・実行)

授業アンケートと授業改善計画

2024 度も授業アンケート及び授業改善計画を実施しました。授業改善計画は、授業アンケート回答に対する担当教員からの応答により、学生が自身の今後の授業への取り組み方や学修活動の振り返りにヒントを得ることを目的としたものです。授業改善の参考資料として引き続き活用いたします。

【授業アンケート】

対象	全科目		
実施方法	FerrisPassport の授業アンケート機能利用		
実施期間	前期	授業アンケート(通常科目) : 2024 年 7 月 15 日(月)～27 日(土)	
		授業アンケート(集中講義) : 第 1 ターム	8 月 1 日(木)～14 日(水)
		第 2 ターム	8 月 26 日(月)～9 月 6 日(金)
	後期	授業アンケート(通常科目) : 2025 年 1 月 6 日(月)～1 月 24 日(金)	
		授業アンケート(集中講義) : 第 1 ターム	2 月 3 日(月)～2 月 14 日(金)
		第 2 ターム	3 月 6 日(木)～3 月 16 日(日)
回答率	(前期) 15.0% (後期) 12.7%		

【授業改善計画】

対象者	全教員		
実施方法	FerrisPassport のアンケート機能利用		
実施期間	前期	授業アンケート(通常科目) : 2024 年 7 月 30 日(火)～8 月 21 日(水)	
		授業アンケート(集中講義) : 第 1 ターム	8 月 22 日(木)～9 月 5 日(木)
		第 2 ターム	9 月 10 日(火)～9 月 24 日(火)
	後期	授業アンケート(通常科目) : 2025 年 1 月 28 日(火)～2 月 21 日(金)	
		授業アンケート(集中講義) : 第 1 ターム	2 月 18 日(火)～3 月 14 日(金)
		第 2 ターム	3 月 18 日(火)～3 月 31 日(月)
提出率	(前期) 82.1% (後期) 72.7%		

卒業生調査

卒業生という外部の視点からも本学の教育の成果・効果を明らかにし、本学に対する期待、要望を把握することを目的として卒業生調査を実施しています。

大学時代にもっと熱心に取り組めばよかったと思う授業としては、毎年、語学科目や共通科目が挙げられます。自分の所属学科の科目だけではなく、幅広い関心を持つことの大切さを実感していることが分かります。また、本学で学んだ／出会ったことで今「とても役に立った」と思うこと（自由記述）の設問からは、大学で学ぶ知識や経験のほかにも、For Others の精神、様々な人との出会いを糧にそれぞれ社会で活躍されていることが分かる結果となりました。

また、2022 年度からは在学生に対して、このように様々な環境にいる先輩たちが、自身のフェリスでの学びを振り返った時に感じていることを共有して、より充実した学生生活を送ることができるようメッセージを発信しました。

今後、本アンケートを継続して、カリキュラムの一層の充実を目指します。

【調査及び結果概要】

実施期間：2024 年 10 月 7 日～11 月 18 日

実施方法：葉書で依頼し、web にて回答

対象人数：516 名（2019 年 3 月出学者）

有効回答：52 名（回答率 10.1%）

PBL 科目の推進

中期計画 21-25 PLAN のひとつである「PBL 科目の推進」として、PBL 科目における学生の活動経費（交通費等）の補助が挙げられます。

2024 年度は、支援対象科目 12 科目（履修者数 159 名）のうち、申請のあった 25 名に 66,438 円（予算執行率 66.4%）の支援を実施しました。

大学院の FD 活動

2020 年度より、教育能力向上を目的として、大学院博士後期課程学生にプレ FD を実施することが、大学 FD 活動計画に明記されました。対象の大学院生は、大学 FD 講演会や授業参観に参加して「FD 活動報告書」を提出しました。

授業参観に参加した大学院生は以下のように考えました。

- ・演習形式のゼミの見学を通して、指導法や生徒との接し方を学び、自らの知見を増やすことができました。
- ・将来、ゼミ形式の授業を行うときのことを考えつつ、指導者としてどう接していくかを考える機会になりました。

2024 年度活動内容

期間	テーマ、トピック	主催
4 月	FD オリエンテーション(新任教員対象、カリキュラム及び施設等説明)	英語教育運営委員会
5 月 8 日(水)	FD 勉強会「2025 年度以降のカリキュラムについて」	国際交流学部
6 月初旬～7 月中旬	前期授業アンケート実施(授業への要望)	大学 FD 委員会
6 月 10 日(月) ～6 月 29 日(土)	専任教員による授業参観(対象:専任教員担当科目)	大学 FD 委員会
6 月 26 日(水)	FD 勉強会「今後の大学院生の指導について」	国際交流研究科
7 月中旬～9 月中旬	前期授業アンケート実施(学生の自己評価・成長)	大学 FD 委員会
7 月 10 日(水)	FD 勉強会「校外実習の現状と今後のあり方について」	文学部日本語日本文学科 日本語教員養成講座
7 月 24 日(水)	アセスメント・テスト分析報告会	大学 FD 委員会
7 月 31 日(水)	FD 勉強会「研究・教育における AI 活用の可能性と課題の検討」	教員有志
7 月下旬～9 月下旬	授業改善計画	大学 FD 委員会
9 月 13 日(金)～30 日(月)	Ferris 学修行動調査(対象:4 年次生※9 月卒対象者)	大学 FD 委員会
10 月 2 日(水)	FD 勉強会「学生とのコミュニケーションツールについて」	音楽学部
10 月 5 日(土)	FD 勉強会『英語スタンダード・コースの教科書及び教授法、全学生が使用可能な自学習ソフト「BrainPOP」について』	英語教育運営委員会
10 月中旬～11 月中旬	教育の質向上に向けた取り組み－卒業生調査	大学 FD 委員会
11 月中旬～1 月中旬	後期授業アンケート実施(授業への要望)	大学 FD 委員会
12 月 4 日(水)	FD 勉強会「配慮が必要な学生の対応や成績評価等について」	音楽学部
12 月 4 日(水)	FD 勉強会「2025 年度以降の留学希望者支援」	文学部英語英米文学科
12 月 4 日(水)	FD 勉強会「自身について考え、悩む ～教育実習を契機として～」	教職課程
12 月 4 日(水)	FD 講演会「SA の役割及び教育的効果について」	大学 FD 委員会
1 月 11 日(土)	FD 勉強会「卒業生および在学生から聞く本学での学びと就職活動の経験」	留学生科目委員会
1 月 31 日(金)	FD 勉強会「高校生と初習外国語教育」	初習外国語教育運営委員会
1 月上旬～3 月中旬	後期授業アンケート実施(学生の自己評価・成長)	大学 FD 委員会
1 月下旬～3 月下旬	授業改善計画	大学 FD 委員会
2 月 25 日(火)	FD 勉強会「大学院教育のあり方について」	人文科学研究科
3 月 26 日(水)	FD 勉強会「実務経験者から見た大学における PBL 教育の在り方」	CLA コア科目運営委員会
3 月中旬～4 月中旬	Ferris 学修行動調査(対象:2・4 年次生)	大学 FD 委員会
4 月～2 月	教育の質向上に向けた取り組み－PBL 科目の推進	大学 FD 委員会
4 月～3 月	教育の質向上に向けた取り組み－大学院の FD 活動	大学 FD 委員会

以上

2024 年度大学FD勉強会実施報告

日時:2024 年 12 月 4 日(水) 18:20~19:20

会場: オンライン (Zoom)

題目: SA の役割及び教育的効果について

プログラム

- ・開催の経緯
- ・本学における SA を取り入れた授業の事例紹介 (コミュニケーション学科専任教員及び SA 複数名)
- ・意見交換・質疑応答
- ・全体のまとめ、今後の展望について

ファシリテーター: 小ヶ谷コミュニケーション学科主任

登壇者: 齋藤孝滋教授 (文学部コミュニケーション学科)

U.Y 氏 (文学部コミュニケーション学科 3 年)

M.M 氏 (文学部日本語日文学科 3 年)

対象者: 本学専任教職員

出席者: 専任教員 26 名、職員 18 名、学生 2 名 合計 46 名

講演会の概要

1. 開催の経緯 (小ヶ山大学 FD 委員会委員長)

「SA (スチューデント・アシスタント) とは、教員と履修者との橋渡し役となるなど、授業を双方向化するうえでも重要な役割を担っている。また、SA となった学生にとっては、教員側の視点を持つことにより、主体的に学ぶ姿勢の大切さや責任感を身に付けるなど SA の経験を通じた成長が期待されている。

2022 年度の大学設置基準の改正において、指導補助者 (SA 等) の役割が明示的に規定され、これは、SA 等の「授業への参画を促進し、学生へのより手厚い指導体制を確保することを通じ、大学教育等のより一層の質の向上を期待するもの」とされている。

今回の FD 勉強会では、SA を採用した複数の授業を展開している文学部コミュニケーション学科専任教員及び SA からの具体的な事例に基づいた報告を踏まえて、SA の役割および教育的な効果を検証し、今後の展望について考える機会といたし、大学 FD 委員会及び文学部コミュニケーション学科の共催で実施するに至った。

2. 本学における SA を取り入れた授業の事例紹介

(1) 発表 : 齋藤 孝滋教授 (文学部コミュニケーション学科)

よりよい授業の因果構造における SA 業務の位置について、過去に文学部の授業 (専門ゼミを除く) を対象に実施したアンケートの結果、SA を活用した授業は、授業の説明の適切性、授業への関心、教室設備などの点において「履修した授業について他の学生に勧めたいか」との間に重要な関係があった。

また、学生の卒業論文の中から「共分散構造分析モデル」、SA 体験学生 2 名のアンケートについて説明があり、SA 業務の経験が学生の自己成長につながっていること、その成果として学生のスキルアップになったことについて紹介された。

(2) 発表 : U.Y 氏 (文学部コミュニケーション学科 3 年)

主な業務内容は、履修者の指導補助で、授業で使う Adobe ツールの操作でわからないところを履修者に教える以外に、必要に応じてテキスト化を行うこと。

SA の経験を通してよかったことは、自分自身学び直しができることや、インプットとアウトプットを繰り返すことで、学びを深められることができたこと。また、教える側に立つことで、先生としての疑似体験もでき、貴重な経験となった。その他にも、ゼミの時間以外で直接先生と会話できる機会となり、担当教員からの声掛けやお礼の言葉がやる気につながった。

学生の視点から見た SA 制度の改善及び拡大については、SA 制度についての認知度を上げるために説明会（オリエンテーション）の実施や SA 業務内容を応募時に明示すること、どんな人を SA として採用したいかなどが示されていると、応募する学生が増えて、拡大できるのではないか。

(3) 発表：M.M 氏(文学部日本語日本文学科 3年)

主な業務内容は、履修者のレスポンスを返したり、相談対応をしたり、活動報告の返却のほかに、PC の準備、プリント配布、出席カード回収といった授業補助を行うこと。

SA の経験を通してよかったことは、履修者の対応や授業終了後に担当教員と話すことで、自分自身の視野が広がり、気づきを得ることができた。日本語教育学について益々興味関心が高まり、更なる学びにつながった。

学生の視点から見て SA 制度の改善点としては、他のアルバイトをしていることもあり、年収 103 万円を超えないよう調整したため、違った形で報酬を受け取ることができるのではないかと感じた。

3. 意見交換・質疑応答

- ・他学科で SA 制度を利用したことがないため、イメージがつかなかった。
- ・実際に SA 制度を利用したことがあり、SA 学生にとっては様々な気づきがあり、成長につながったことを感じたことがある。
- ・PC 操作がある授業をいくつか担当しているが、SA 及び TA なしには成り立たないくらい、重要な役割を果たしている。また、教員よりも SA の方が質問をしやすかったといった履修者もいる。
- ・遠隔授業の時は、SA が学生にどのように説明しているかが見えにくいので、対面授業の方が効果的だと感じた。
- ・学生の視点から見た SA 制度の改善のうち、SA 募集については、教員が声かけすることで強制にならないように配慮する必要がある。
- ・国際交流学科でも過去に募集をかけたことはあるが、その時は応募がなかった。募集内容の工夫も必要である。
- ・語学科目での SA 制度の活用は効果的ではないか（ディスカッションでのリーディング等）。
- ・上級生が下級生を教えることで、下級生にとっては身近なロールモデルとなり、初年次教育ではより効果があるのではないか。
- ・他大学で TA を採用したことがあるが、実技科目では効果的で、履修した学生が授業補助に入ってくれることで、安心して任せることができる。

4. 全体のまとめ、今後の展望について(大畑大学 FD 委員会副委員長)

- ・実技系・実習系科目において SA 制度を活用することはイメージしやすかったが、大人数の授業やグループディスカッション、語学科目など様々な授業で活用できる可能性があることが、本日の勉強会をとおしてわかった。
- ・SA 学生にとっても得るものが多く、学生からも実際に評価してもらえているため、教育的効果のある制度であり、ぜひ今後、更なる活用を検討してほしい。
- ・SA 制度の認知度、募集方法、報酬、遠隔授業での活用など、いくつか課題も見えてきたため、今後見直しをしていきたい。

【アンケートから】

- ・勉強会の内容及び質疑応答については、全員から「わかりやすかった」「参考になった」という回答だった。

- ・「今後 SA 制度を利用してみたいですか」という問いに対しては、回答者の半数以上が「積極的に利用したい」「機会があれば利用したい」という回答だった。
- ・勉強会の時間帯については、当日の会議の影響で開始時間が大幅におくれたことについて、コメントが多数寄せられたため、開催日時の設定については課題が残った。
- ・「勉強会に参加して、参考となる情報や気づいた点」に関する主な意見はつぎのとおり。

SA の学生にとって、給与面での配慮も必要であることは貴重な気づきでした。
音楽学部には副手制度があるので、そのまま使えないというところで、SA は「使用しない」としてしまいましたが、副手さんと似ているのは、教員が縮められない学生との距離を、年齢が近いというのもあると思うのですが、副手さんは近くすることができるというのはあるな、と思います。学内の事情が変われば、音楽の授業（座学演習系）での可能性はあるのかな、とは思いました。
学生が SA についてどのように感じているかがよく分かりました。とくに、SA の作業のあらましやどのような人を求めているかを明示して欲しいという要望を聞くことができて良かったです。
SA が教養系の授業の中でも活用できそうな印象を持ちました。（導入演習系の授業のファシリテート役など）
授業運営に関しては SA 学生はかなり効果がありそうですね！履修学生にもいい影響がありそう。
「募集の際に教員からのコメントがあるとよい」や「SA の知名度アップが必要」などの学生発表の中のコメントは参考になり、今後の SA 制度の運営の中で反映できそうなものもあるのではないかと感じました。 教務部長が、SA の活用が、SA 学生、履修者、教員全てにメリットがあるとコメントされていたとおり、今後より積極的な活用につなげられる契機となるような勉強会であったと感じました。
SA 経験者の体験談が大変興味深かったです。SA 経験者のお話しの部分は、これから SA をやってみたいが迷っている学生にとってもとても参考になるのではないかと。何らかの形で SA 募集の際に活かせると良いのではないかと。
SA（上級生）が授業サポートに入ることで効果があることがわかり、支援が必要な学生も増えているため、活用した授業が増えるといいのではないかと感じた。

以上

2024 年度アセスメント報告会 実施報告

大学 FD 委員会副委員長

教務部長 大畑 甲太

日程 2024 年 7 月 24 日（水）10:40～12:10

場所 対面（2305 教室）・オンライン（Zoom）

題目 アセスメント・テスト分析報告会

対象 本学教職員及び博士後期課程学生

発表内容

- ・高等教育における教学マネジメント／学修成果の可視化の必要性
- ・GPS-Academic を用いた可視化の可能性
- ・アセスメント・テストの分析結果の説明

登壇者

嶋原 ゆり氏

（ベネッセ i-キャリア 大社接続事業本部 カスタマーサクセス 1 課）

高橋 広平氏 ※質疑応答のみ

（ベネッセ i-キャリア 大社接続事業本部 カスタマーサクセス 1 課 課長）

講演会の概要

1. 開催にあたって: 小檜山 ルイ 学長

- 高等教育の現場では、教学マネジメントと学修成果の可視化がますます求められている。
- 本学では 2023 年度から新たに、株式会社ベネッセ i-キャリアの GPS-Academic というアセスメント・テストを導入し、現在の 1 年次生及び 3 年次生に実施した。このテストでは、学生が自らの成長を客観的に評価することができ、その要因を主観的に把握することができる。
- 今回の報告会は、結果分析を共有し、課題を認識することで、カリキュラムやプログラムの改善につなげることが目的である。

2. アセスメント・テスト分析報告: 嶋原 ゆり氏（ベネッセ i-キャリア）

はじめに

- GPS アカデミックは問題解決能力を測定するアセスメント・テストである。
- 思考力、姿勢・態度、経験、学生意識調査の 4 つの領域で能力を可視化する。
- 2022 年度の単年実績は 180 大学、20 万人が受験した。
- 高校、大学、社会で一貫した指標で測定可能である。
- 客観評価、主観評価、意識調査を組み合わせることで学生の状態を多面的に可視化する。
- 学生のキャリア形成にも活用可能である。

1年生のアセスメント結果分析

- 受験率は76%。
- コラボレーションと対人関係の項目が相対的に高い傾向が見られた。
- 多様性を受容する経験が高く評価されている。
- 授業中のグループワークやディスカッションへの積極的参加と多様性受容の経験に相関が見られた。
- 専門分野の勉強や語学学習に意欲を示す学生が多い。
- 予習・復習の習慣がない学生が約5割いる。
- 授業についていけるか不安を感じている学生が一定数存在する。

3年生のアセスメント結果分析

- 受験率は73%。
- 思考力総合のスコアが昨年より若干低めだが、姿勢・態度や経験は同程度のスコアであった。
- 入学後のイメージが良くなったと回答した学生が35-40%いる。
- 成長実感について、7-9割の学生が肯定的に回答している。
- チームワークやリーダーシップを身につけることが役立っていると感じる学生に、成長実感が高い傾向がある。
- 就きたい職業や仕事が明確になっている学生ほど成長実感が強い。

活用事例と今後の展望

- 東京家政大学では、GPS-Academicを導入することで多角的に学習成果を測定できるように整備された。
- 高校でも活用する取り組みが増えている。
- 入学者の成長を経年で追跡することが提案されている。
- 総合型選抜で入学した学生の特徴や伸び率に注目することが重要である。
- 入試検証や学生のハイパフォーマー分析にGPS-Academicの結果を活用できる。

4. 質疑応答

質問:

個人の分析結果の取り扱いについて、個人情報保護の観点からどのように対応しているか。

回答:

多くの大学では、新入生の個人情報同意書にテスト結果の利用について記載している。また、テスト受験時にも同意を得るシステムになっている。

質問:

学生面談での活用方法はどのようなものか。

回答:

学生面談カルテを用意しており、学生の強みや弱み、不安などを把握できる。ただし、活用

は事前の同意取得が必要。近畿大学では、学生に結果使用の可否を選択させる方式を採用している。

質問:

共同的思考力が低い傾向にある原因と対策は何か。

回答:

体験型学習の増加により基礎学力が低下している可能性がある。基礎的な読解力や文脈理解力を身につける教育が必要。

質問:

アセスメント結果の具体的な活用方法はどのようなものか。

回答:

大学全体、学部・学科、授業の3つのレベルで活用可能。大学全体の教育方針の検証、学部・学科のカリキュラム評価、個々の授業での学生理解と指導に役立てられる。

質問:

キャリアデザインへの活用可能性や他のテスト（MBTI等）との違いは何か。

回答:

GPS-Academicは性格診断ではなく、現状の能力を測定するテスト。大学での学びが汎用的能力にどう影響しているかを測定し、キャリア形成に活用できる。

質問:

クラス分けや学生サポートへの活用事例はあるか。

回答:

クラス分けの際に能力別や多様性を考慮したグループ分けに活用している大学がある。また、初回面談時に学生の強みを褒めるなど、コミュニケーションツールとしても活用されている。

質問:

1年生から3年生にかけての変化はどのように把握できるか。

回答:

現状では経年的なデータがないため断言できないが、3年生では不安が取り除かれている傾向がある。来年度以降、経年データが取れれば詳細な分析が可能になる。

アンケート集計

発表についての感想

- 具体的で細やかなデータが多く使われており、今後を多様に考える素材を提供いただいたと思いました。
- ポイントをまとめて、手際よく発表してくださり、感謝いたします。本学の長所・短所がよく分かり

ました。

- 前年度との比較において、本学の傾向を適確に説明いただいた。
- 全体的にややペースが速かったのですべてには追いつけなかったのですが（これは私自身の力量の問題です）、データ分析の際に立てられた仮説が非常に的確であると感じ、本学の特性を理解いただいていることが感じられました。ありがとうございました。
- 本学での講演が2回目ということもあり、本学の事情をある程度把握しながらお話いただき、高橋課長とともに質疑も的確に返されていたので、参考になることが多かった。
- 情報量が多く、今後また資料を見直す必要を感じました。
- とても分かりやすく、Q&Aの返答も的確なものだった。

発表及び勉強会全体に関する感想

発表及び勉強会全体に関する感想

- GPSを学内でどう活用していくのか、多面的な活用をコーディネートできる部署があるとよいのではないかな。
- 概要説明というのはとても重要なのですが、今後この調査が定着していく中では、たとえば観点を絞った報告会（今年はリーダーシップやコラボレーションの観点に着目する、今年は入試との関連に着目する）というスタイルもありなのかな、と思いました。あとは、GPS-アカデミックの内容をクラス編成やグルーピングにまで使う、というのは、合理的な部分もあるなとは思いつつ、やや「企業的」な視点（人事っぽい）かなとも思い、クラス内で学生同士が相互に学び合うという（ある種の偶発性を持つ。またそこがフェリスらしさでもあるかと）教育的な視点との相性については見極める必要があるのではないかなと思いました。
- 結果を様々な形で活用できそうなのがよくわかったので、あとはうまく活用できるかどうかは大学次第なのだろうと感じた。初めて参加し、具体的な結果やその後の利用方法を知れたのでとても良かったです。今回の説明で診断とは異なり、テストであることということで結果が直接学生本人が活用できるのでそのあたりをもっと前面に周知してアセスメント・テストの回答数を増やす周知方法や掲示内容に工夫ができればと感じました。
- 具体的な利用例・活用例がもう少しあるとさらに有難いです。

以上